



4歳女兒



視能訓練士

STORY_4

見える可能性を、あきらめない。

北浦かおり

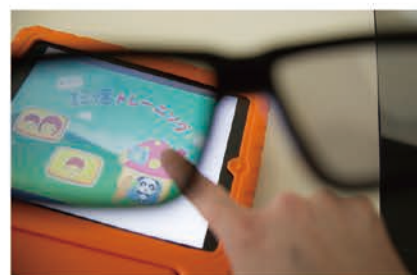
古川中央眼科 視能訓練士

東北文化学園大学 リハビリテーション学科視覚機能学専攻2012年卒(宮城県迫桜高等学校出身)

眼のトレーニングによって視力を改善するエキスパート、北浦かおり。ある日、ひとりの小さな患者と出会った。幼稚園での健診で「視力低下」といわれた、ゆいちゃん(仮名)4歳だ。メガネをかけても視力は0.3。メガネをかけて1.0になることをめざし、北浦はチームで眼のトレーニングをはじめた。8歳までならトレーニングによって視力が改善する可能性がある。眼の症状にあわせたメガネをかけ続けることで、視力を上げるのだ。しばらく後、メガネトレーニングだけでは視力アップが難しいと判断した眼科医は、シール状の眼帯(アイパッチ)をトレーニングに取り入れることにした。視力のよい眼にアイパッチを貼り、弱いほうの眼を集中して訓練するのだ。見た目に目立つアイパッチは、子ども同士でからかわれることもある。毎日のトレーニングは本人と家族にまかせるしかない北浦は、「次の検査まで、がんばって続けようね」と小さな背に手をあてた。トレーニングで最も苦しいのは、治療の終わりが読めないことだ。「いつ視力が上がるかわからなくて、そのままのことも、弱くなることもある」という。トレーニングが長びくなか、ゆいちゃんはアイパッチを嫌がって泣き出したこともあった。そんなとき、北浦は無理強いはいしない。トレーニングへのやる気が落ちないように、検査のとき明るく声をかけ続けた。視力表を示し、見ると「ピンポン！ 正解！」。ヒントになったのは、学生時代の自らの経験だ。沈んでいる気持ちを吹き飛ばすように、先生がいつも明るい声をかけ、前を向く気力をくれた。北浦の明るい声に支えられてトレーニングを重ね、ゆいちゃんは小1になった。視力は、しばらく0.8のままだった。いつものように検査をはじめた。0.8…、0.9…。あ、見えてる！ 続く1.0…、ついに1.2まで見えた。奇跡のような数値に「すごい、がんばったね！」。自分のことのように喜ぶ北浦に、ゆいちゃんはちょっと照れたようにうなずいた。見えるようになることは、これからの人生を大きく変える。だからこそ北浦は、可能性をあきらめない。その人がもつ最大限の視力を引き出すために。



「髪飾りがかわいいね」。いつも声がけを忘れない



特殊なメガネをかけ、ゲーム感覚で行う訓練も